

海老名弾正の黒住教理解

洪 伊 杓

1. はじめに

明治政府は神道に由来する諸宗教を「教派神道」の独立教派及び附属教会に編成した。まさに国家神道と区別された「宗教としての神道」、所謂「教派神道十三派」¹であった。民衆宗教としての信仰を主張した黒住教、天理教、金光教、禊教など新宗教団体は、始めは神道国教化の政策と衝突したが、天皇制中心の教理変更を受け入れ、「教派神道」という範疇に新しく編成された。

教派神道とキリスト教が明治政府から同じ国家主義実現の政策的パートナーとして公認されたのが1912年に開催された神道、仏教、キリスト教の「三教会同」である。海老名は、教派神道が政府から公認された宗教として「三教会同」の対象として置かれたという事、また朝鮮、台湾など海外布教も政策的な支援を共に受けた事から、「多神教から一神教への進化過程」にある過渡期的宗教という点を尊重する。しかし、民間信仰的(迷信的)で幼稚な要素を持っているという点について明確に批判した。²

海老名は倫理道德としての「国家神道」を基本としながらも、自ら「朝鮮伝道論」を実践していた帝国の新たな植民地においては「宗教としての教派神道」がもつ教化の可能性と潜在力を認めていた。この点において、海老名の神道理解を究明する際には彼が教派神道(宗教神道)をどのように扱ったのかを明らかにすることが重要である。なぜならば、「神道は二ツに分れてをります。一ツは國民道德になって來つゝあるものであり、他は宗教的なものであります」³と海老名が評価したように、倫理・道德としての国家神道(神社神道)と信仰・宗教としての教派神道(宗教神道)を考察することによって海老名の神道理解の全体像を分析することが出来るからだ。

¹ 神道十三派という表現が一般化したのは、1908年の天理教の独立認可以降、1945年の宗教団体法の廃止まで約40年の間、政府公認の神道教派が以下13派であったからである。天理教と金光教は教派神道に分類されることを拒否するので、現在は「諸教」に分類されている。(文化庁編『宗教年鑑：平成21年版』ぎょうせい、2011、5-6.)

² 「山川草木の……此の神靈の概念を明白にする事(敬神思想、筆者註)は神道でも儒教でも駄目であった」(海老名弾正著『新日本精神』滋賀、1935、9.)

³ 海老名弾正「新日本精神」『朝鮮講演』、1936、17-18.

海老名の教派神道理解については、筆者の拙稿によって「民間信仰としての民衆的神道に対する廃棄指向的態度と国民道徳や倫理として新しく主唱された国家神道に対する積極受容的態度の間に置かれた中間的な態度として教派神道を眺めていた」⁴と曖昧な評価をすることに留まっていた。しかし海老名は、教派神道13派の中でも代表的な宗教団体である「黒住教」に格別な理解と評価を多くの文献の中で残している。代表的に海老名が若い時代に執筆した『基督教の観たる黒住教の真理』(1898)⁵を挙げることができる。⁶ここで、上記の文献を中心に海老名が残した黒住教理解を分析することによって、彼の神道理解の全体像をより明確にする。

2. 海老名の「黒住教」理解の前提

2-1. 「黒住教」概観

天理教・金光教と共に「幕末三大新宗教」の一つとして呼ばれる「黒住教」は、教派神道(宗教神道)13派の中でも最も早く政府から認定された「明治期にかけて発生する新宗教の先駆け」である。⁷教祖である黒住宗忠は、1814(文化11)年11月11日、日拝をする途中、「天照大神」と一体となる「天命直授」⁸という宗教体験に基づいて創立した神道系の新宗教である。⁹東京帝国大学で初めて「神道学」講座を担当し、その後「神道学会」、「神道青年連盟協会」を設立した田中義能(1872-1946)は、『黒住教の研究』(1932)において、次のように黒住を高く評価している。

⁴ 洪伊杓「海老名弾正の神道理解に関する類型論的分析」『アジア・キリスト教・多元性』第12号、2014、1-17.

⁵ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』黒住教研究資料第壹編(換謄寫非賣品)、明治31年(1898).

⁶ 関岡一成は、海老名が著した『基督教の観たる黒住教の真理』の存在を言及し、彼の黒住教に関する海老名の関心を簡略に紹介したが、本格的かつ具体的な分析にまでは至っていない。(関岡一成『海老名弾正：その生涯と思想』東京：教文館、2015、550.)

⁷ 村上重良「黒住教・金光教の宗教史的意義」『近代民衆史の研究』京都：法蔵館、1963、163-174.

⁸ 黒住忠明『黒住教教祖伝』岡山：黒住教青年連盟本部、1964、40-41.

⁹ 黒住教に関する研究論文は次のようなものがある。；谷口澄夫「幕末における黒住教についての一考察——主として岡山藩との関係において」『岡山大学教育学部研究集録』(6)、岡山大学教育学部、1958年3月、65-81. ；小寺基之子「黒住教の歴史的 성격」『岡山史学』(24)、岡山史学会、1971年12月、39-64. ；ひろたまさき「幕末・維新期の黒住教——赤木忠春と本多忠之助」『岡山大学法文学部学術紀要』35(史学編)、岡山大学法文学部、1974年10月、13-25. ；中村真人「近代日本の形成と民衆宗教：教派神道『黒住教』の事例から」『東京女子大学比較文化研究所紀要』67、2006、1-15. ；杉島威一郎「黒住宗忠の『道』と『黒住教』」『芦屋大学論叢』44、2006年11月、112-95. ；中村聡「初期黒住教と国学者をめぐるの一試論」『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』(2)、2008年3月、145-170. ；藤井麻央「明治後期の教派神道：岡山県下の金光教と黒住教」『神道宗教』(240)(神道宗教学会第68回学術大会紀要号)、2015年10月、118-120. ；権東祐「教派神道の朝鮮布教からみる近代神道の様相——神道修成派・黒住教・神宮教を事例に」『宗教研究』92(1)、2018、27-51.

「我が神道には、所謂國學四大人の出づるあつて、その主張たる純かむながらの道は、能く知識階級を指導したのであるが、一般民衆の教化には、やゝ没交渉の觀あるを免れなかつた。當時の儒教亦然りであつた。佛教は、……自らが墮落し、十分に一般民衆の信仰を博することが出来なかつた。此の時に當つて。我が黒住宗忠は、宗教的天才を以つて備前を出で、一旦豁然として神道の奥義に徹底し、起ちて之れを以つて民心を教化し、民風を作興し、鬱然たる一新宗教を起したのである。」¹⁰

田中は、本居・平田など国学者の時代的な貢献を認めながらも、彼らの非民衆性と非宗教性という限界を明確に指摘している。儒教・佛教も民衆教化に失敗している時、「宗教的天才」あるいは「天才的な人」¹¹である黒住宗忠が「神道の奥義」を徹底し、民衆教化に貢献したと説明している。¹² 後述するが、黒住教への田中の姿勢は、海老名と類似している。

田中は黒住教の「教義論」において「宗忠は、道を以つて直に天照大神として居る」¹³とし、「天照大神」がこの宗教の最も尊い存在である点を明確にした。したがって「宗忠の道とせる所は天照大神であつて、天照大神は宇宙の本體、無限の生命」¹⁴であると強調する。

しかし「天照大御神を主神とし、之に八百萬神と教祖宗忠神とを配して、併せ奉齋し、神道の有力なる一派として世に行はれて居る」¹⁵という説明からも分かるように、臣民の表現神でもある「八百萬神」が「天照大神」と「一心同体」になることを強調した。したがって、祭神として「教會所は、何れも齋殿を設け、天照大御神、八百萬神、教祖神を奉齋」¹⁶する。

社会主義者出身として戦後を代表する黒住教研究者となった延原大川(1910-1987)は、『黒住宗忠とその宗教』(1962)において、次のように宗忠を評価している。

「純粹に日本の風土の生んだ宗教家がある。それは、備前の一^{ねぎ}称宜黒住宗忠である。宗忠が現れて、始めて日本は、日本独自の伝統に立つ巨大な宗教家を有する光榮を担うことになつたのである。すなわち、釈尊やキリストや、老子、孔子などと対等、あ

¹⁰ 田中義能『黒住教の研究』東京：日本學術研究会、1932、「序」2.

¹¹ 田中は「宗忠は、天才的の人である」と繰り返して強調する。(田中義能『黒住教の研究』、7.)

¹² 本論の中でもこの点を繰り返して強調している。「幕末、思想界混亂し、國學四大人の如き起つて、神道を唱へ、知識階級を指導し、儒教亦知識階級のみ行はれ、佛教は、……幕府の厚き保護に馴れて墮落し、庶民の健全なる信仰を渴望するもの、極めて切なるものあるに當つて、黒住宗忠は、右の如き、簡明直截の教義を立て、一新宗教を創立したのである。その教は、能く時勢に適合し、維新前後の過渡時代に、能く社會の木鐸となり、思想善導に貢献することの大なるものがあつたのは、淨ふべからざる事實である。」(田中義能『黒住教の研究』、2.)

¹³ 田中義能『黒住教の研究』、22.

¹⁴ 田中義能『黒住教の研究』、24.

¹⁵ 田中義能『黒住教の研究』、2.

¹⁶ 田中義能『黒住教の研究』、69.

るいはそれ以上の立場でもものいえる、日本の真の代表的宗教家を有することになったのである」¹⁷

「巨大な宗教家」としての宗忠を強調した延原は、「宗忠は……大自然の無為の化育に参加した一大人格である。かくのごとき宗教的人格は、キリストにも釈尊にも、マホメットにも求めがたい、日本の風土が生んだ独特のものである」¹⁸とし、宗教的な面のみではなく、倫理道徳的な面においても高く評価する。結論的に黒住宗忠は、明治期の神道が急激に倫理化（非宗教）する中で、高尚な人格者として神道に欠けていた宗教性を「天照大神」と一体同体になる宗教的な体験によって近代神道を完成した人物のように評価されている。

2-2. 海老名の「黒住教」言及時期

海老名が黒住宗忠について初めて言及した記録は、宗教評論家である網島梁川^{つなしまりようせん}（1873-1907）が書いた1897年6月2日の日記にある。網島は「神戸教会牧師海老名氏東上して本郷教会の牧師と記した。予氏を訪ふて例の宗教談に吾が心を鼓吹せり。黒住宗忠の宗教家としては平田、本居の上にあるよしを述べ、其のReligious intentionのありし事を詳説したり」¹⁹と記録している。網島は岡山出身で、高梁教会で古木虎三牧師より受洗した組合教会のキリスト者であった。黒住宗忠も岡山出身で岡山を基盤として黒住教を提唱したため、海老名と網島との間にこのような対話が交わされた可能性がある。そして、東京の早稲田留学以後、倫理学に傾倒し、伝統的なキリスト教信仰や神学の宗教性に懐疑心を持った網島に、海老名は黒住教とキリスト教が持っている宗教性における共通点を力説した可能性もある。「黒住宗忠の宗教家としては平田、本居の上にあるよしを述べ」という部分は、海老名が倫理・道徳としての神社神道（国家神道）の形成に貢献した本居や平田と比べ、信仰・宗教としての代表的な教派神道（宗教神道）の形成を導いた黒住宗忠の存在をより高く評価したことを意味する。これは本居・平田を認める前提の上で、黒住の宗教史上の意味を強調する海老名の独特な理解を現している。

この対話があった翌年（1898）²⁰、『基督教の観たる黒住教の真理』（1898）という60頁ほどの書物が出版されているが、この時期の海老名は黒住教に深く心酔していたと考えられる。表紙には「海老名弾正君草案の寫」と記されており、黒住教側からの依頼というよりは、若い海老名からの積極的な提案で出版が成り立った可能性も否定出来ない。海老名が「日本宗

¹⁷ 延原大川『黒住宗忠とその宗教』東京：明德出版社、1962、「自序」1-2.

¹⁸ 延原大川『黒住宗忠とその宗教』、7.

¹⁹ 網島梁川『梁川全集』第8巻、東京：大空社、1995、472.；関岡一成『海老名弾正：その生涯と思想』、550-551. から再引用。

²⁰ 「来る明治三十二年三月二十ご日は教祖五十年の回忌に相當する」と記されているので、西暦1898年に執筆・刊行されたと考えられる。（海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、1898、1.）

教の趨勢」(1896)や「神道の宗教的精神」(1897)などの神道に関して本格的な論説投稿を行なった時期もこのように黒住教に傾倒していた時期と重なっている。したがって、海老名は「神社非宗教論」とともに展開していた神社神道(国家神道)をも肯定しつつ、そこから希薄になる神道の宗教性の確保についても強い関心を持ち代案を模索したのである。

その後、海老名は黒住教への関心を失わず、『新人』の論説「化石思想」(1900)の中で黒住教を「新生命を発生したる」「大日本帝國の預言者」²¹であると高く評価し、『基督教十講』(1915)の「日本固有思想と基督教」においても黒住教が強調する「神明」とキリスト教の神との同一性を述べつつ、敬神思想の価値を論証した。1930年代に入ると、『新日本精神』(1935)²²という書物や、雑誌の論説「新日本の精神的国是」(1936年1月)、²³そして同タイトルのあらゆる講演録、すなわち、「新日本精神」(朝鮮講演、1936年5月9日)²⁴、「新日本精神に就いて」(ラスキン館講演、1937年7月25日)²⁵「第二講新日本精神に就て」(1937年9月25日)²⁶などで黒住宗忠を積極的に引用してキリスト教が新日本精神に貢献するため、黒住教の教えを積極的に受容しなければならない点を力説した。このように海老名の若い時期の神道理解より晩年の「新日本精神」の理念まで黒住教はその思想の形成に深く関係しているが、とくに初期の『基督教の観たる黒住教の真理』と晩年に朝鮮で行なった講演録はより綿密に考察されなければならない。

2-3. 「神社非宗教論」と「天御中主神」の限界

明治時代は反宗教論的な見解が主流をなすようになり、道徳(倫理)として転落した西欧のキリスト教のように、日本においても宗教はその道徳性を涵養しなければならないと主張された。このような「進化論的宗教観」が当時日本を支配した宗教に対する通念であった。神道は「宗教」の範疇に入っていく事もできず、むしろ神道に対する否定的通念がより強化された。前述した「民間信仰としての神道」に対して海老名が強い反感を持ち、その廃棄を主張した事もこのような当時の雰囲気を見ると極めて自然な知識人の姿勢であった。

このように、明治時代当時の日本では「宗教」と言えば神道のような自然宗教が排除される代わりにキリスト教のような、いわゆる「高等宗教」を思い浮かべる傾向が強かった。これと同様に儒教は一種の道徳と認識され、民間信仰や新宗教は迷信とみなされた。このよう

²¹ 海老名弾正「化石思想」『新人』第1巻第3号、1900年9月、13。

²² 海老名弾正『新日本精神』滋賀、1935。

²³ 海老名弾正「新日本の精神的国是」『新人』第4巻第1号、1936年1月。

²⁴ 海老名弾正「新日本精神」『朝鮮講演』第57・8合併号抜刷、京城基督教青年会、1936。

²⁵ 海老名弾正「新日本精神に就て」『ひのもとパンフレット第一輯』東京：新日本精神研究会、1937年7月25日。

²⁶ 海老名弾正「第二講新日本精神に就て」『ひのもとパンフレット第二輯』東京：新日本精神研究会、1937年9月25日。

な「神道は宗教ではない」という観点がむしろ神社非宗教論を生み出す重要な土台・原点となった。「民間信仰としての神道」を強く否定した海老名は、基本的に「国家神道の概念」（神社非宗教論）を受容した。磯前や青野はこのような「倫理性」に基づいた論理を「消極的な神社非宗教論」とし、一方、倫理性と宗教性という両義性を認める「積極的な神社非宗教論」と区別している。²⁷ 海老名は表面的には前者を受容したが、宗教家としての現場では後者を志向していたように見える。それは海老名が「天御中主神」の限界を指摘し、「天照大神」を強調するところに明らかに示されている。

「この迷信打破を敢てしたる日本精神に、宗教的又倫理的基礎付けをなしたるは、古神道及び儒教であった。……賀茂本居の古神道研究の事は陳べずして、飛んで平田篤胤の古神道を陳べ、それが日本精神の宗教的方面に於ける貢献を簡略に論じて見よう。」²⁸

上の引用文のように、海老名は古神道と儒教が迷信を打破し倫理的な「神社神道」（国家神道）に基礎を置いた点、すなわち「積極的な神社非宗教論」について基本的にその貢献を認めている。しかし神道の倫理的な面のみならず宗教的な面も存在する点を強調し、紹介しようとする。これは海老名が「神道」の倫理性と宗教性という両義性をすべて重要視したことを示している。

海老名は、多神教であった神道を一神教として進化発展させた復古神道の賀茂・本居・平田の影響により「天御中主神」の概念を成立させた貢献は大きかったと認めている。

「（儒教における一神教の）一方、古神道があります。賀茂眞淵、本居宣長先生の如き人から、更に續いて平田篤胤になって一神教に歸してをります。平田篤胤は天御中主神に全幅の力を注いだ。彼の古神道は天御中主神崇であります。平田篤胤の日本の精神界に貢献したことは實に甚大であった。」²⁹

海老名は、平田派が「八百万神」をうまく包括できなかった結果、宗教性に欠ける「天御中主神」にこだわった点を批判する。すなわち、観念的（抽象的）で倫理的な意味の「天御中主神」に陥り、日常的（具体的）で宗教的な意味の「八百万神」の価値を見逃したということを指摘した。キリスト者になった後も平田思想の影響を強く見せた松山高吉をも含む批判であろう。

²⁷ 青野正明『帝国神道の形成—植民地朝鮮と国家神道の論理』東京：岩波書店、2015、5.

²⁸ 海老名弾正『新日本精神』滋賀、1935、34.

²⁹ 海老名弾正「新日本精神」『朝鮮講演』、1936、8.

「篤胤等古神道の徒輩は、天御中主神まで復歸することは復歸したが、獨一の天御中主神を遵奉して徹底的に八百萬神を片付け得なかった。何となれば天御中主神は極めて抽象的であって、日本國民の生きた宗教的對象でなかった。故に篤胤は復歸するや否や、忽ち行き詰ったのであるが、彼はこの天御中主神の性格を明かにし、その徳性を顯さんと欲して、私かに耶蘇教を研究して居ります。」³⁰

結局、海老名は平田が神道を完全に唯一神教として進化発展させることには失敗したと考える。「八百万神」を十分に包容できなかったからである。本居、平田などの国学者たちは倫理と宗教を厳格に分離させた「消極的な神社非宗教論」に影響を与えた。

「王政維新後神祇官に於いて、進歩的神道を代表したる者は彼の門人である。けれども時未だ來らず、彼は天保十四年死し去った。王政維新を去る二十五年である。彼は神道に大鉦を加へて八百萬神を片付け、神道をして純然たる唯一神教たらしむることは出来なかった。……彼の門弟子にして、若し篤胤の氣魄を有する者があつたならば、維新の大改革に乗じ、神道の大革新を斷行することは、敢て不可能であつたと言へない。……果たして斷行し得たならば、宗教は政治と偕に並行し、開國進取の大業にあづかることを得たのでありませう。」³¹

海老名は復古神道の言う日本精神としての「敬神」は元々幼稚な水準であり、³²日本の原始神道は幼稚で多神教的であるため、³³キリスト教による唯一神教としての進化が必要であり、キリスト教の伝来によって「大發展大飛躍」が可能になったと評する。³⁴「新日本精神」の第一要素として「敬神」を挙げている海老名の次の説明はその点を明らかにしている。³⁵

³⁰ 海老名弾正『新日本精神』滋賀、1935、35.

³¹ 海老名弾正『新日本精神』滋賀、1935、36.

³² 「日本精神に現れるものは敬神である。……單に此だけでは幼稚である。垂加^{すいか}神道、唯一神道の如きは儒佛二教の側からこれを説明せんとして居るが、唯一神教の爲めに大路を開拓したことは看過されない。」（海老名弾正『新日本精神』滋賀、1935、8.）

³³ 「宗教學的立場からみると、日本のプリミティブな神道は極めて幼稚である。神道は神代の宗教思想が古事記、日本書記を通して現されたものである。神道は八百萬の神々を崇^{あが}むる多神教である。此の多神教の低級な段階より脱出して、唯一神教的なるものにしたのは、浄土眞宗であつて、諸佛を一佛に歸したのは確かに進歩であつた。」（海老名弾正『新日本精神』滋賀、1935、8.）

³⁴ 「然れども神道の此の幼稚な低級な汎神教を正面から打開したのは、儒教でなく佛教でなく、キリスト教の敬神主義であつた。キリスト教の傳來に依つて、從來不完全なる段階に留まって居つた宗教思想は大發展大飛躍をなし始めたのである。多神教汎神教はキリスト教の人格思想に衝突して、以て新天地を開いたのである。」（海老名弾正『新日本精神』滋賀、1935、8.）

³⁵ 「第一、敬神の精神である。……人をして敬神の精神を流し去るかと思はしめた。……唯物主義の教育で

海老名は、既存の多神教的状況では「敬神」が明確に現れなかったが、中江藤樹のような儒学者たちは宗教家としての感覚が不十分であり「徹底し得なかった」³⁶ため、敬神を現すべき古神道の「天御中主神」を見逃したと批判する。しかしその後、賀茂、本居、平田などの影響で敬神思想が「天御中主神」を中心に明治時代に定着した。³⁷ 海老名は明治維新が精神的、宗教的に「天御中主神」を強調した結果、神武天皇まで政治的にもどったが限界があり不足しているとする。

「平田の孫統を帯びてをる人が大道本論といふ一書を著はした。これを見ますと、どこまでも天御中主神を主張してをる。……日本の神社から歴史に現はれてをる所の、即ち神代からずっと後ちまでに現はれてをる神々はみんな天御中主神を拜んだ所の神々であるといふ議論であります。これらが王政維新の一大原因であります。又王政維新は一面には政治上の大改革であるけれども、精神的な方面に看過すべからざる大きなものがある。それは王政復古といふことで、政治上神武天皇まで還るといふのである。こゝが大變面白い所です。神武天皇まで還らねば本當の新日本は出来ないといふのです。」³⁸

単純な過去回帰に過ぎず、未来への新日本の希望をもたらす時には限界がある。政治的次元の神武天皇までの回帰には問題があり、その問題の原因は宗教的意味が不十分な天御中主神の強調のためであるという海老名の観点である。

このように「天御中主神」に執着する「神社神道」は「教派神道」とはっきり区別され、いわゆる「神社非宗教論」が一般化する。しかし宗教的な本質を失った「消極的な神社非宗教論」が普遍化した結果、共産主義・自然科学などを意味する「唯物主義」がより拡散することになった。したがって、海老名は儒教や神社神道よりも新宗教としての教派神道（主に、黒住教や禊教）に期待をすることになる。

あつて、今日に至るも尚その餘毒を残して居る。……クリスチャンの中に生まれた精神は全く之に反し、敬神の精神である。それは日本の敬神思想を徹底的に貫くものであります。」（海老名弾正『新日本精神』滋賀、1935、13-14。）

³⁶ 「藤樹、淡窓等が尊崇した皇天上帝は古神道の所謂天御中主神でなければならぬであります。……けれども彼等は十分この点に徹底し得なかつた。……日本國民の精神となすには不徹底であつた。……彼等は學者であつて、宗教家ではなかつた。」（海老名弾正『新日本精神』滋賀、1935、14。）

³⁷ 「平田篤胤になって一神教に歸してをります。平田篤胤は天御中主神に全幅の力を注いだ。彼の古神道は天御中主神崇であります。平田篤胤の日本の精神界に貢献したことは實に甚大であつた。維新の當時太政官の上位に神祇官があつた。こゝが大事な所である。精神的な所である即ち敬神の現はれであります。」（海老名弾正「新日本精神」『朝鮮講演』、1936、8。）

³⁸ 海老名弾正「新日本精神」『朝鮮講演』、1936、9。

「祭政一致の大運動は、王政復古の一大目的を達したる否や、獨り政治の方面のみが進展して祭祀即ち宗教の方面は頓挫し、取り遺され、遂に神社神道と宗教神道との區別を認め、神社崇敬を以て満足し、自らはその宗教的本質を失ふに至った。爲めに政府及び民國をして、唯物史觀の共產主義に悩まざるに至りたるは、君國の爲めに痛歎置く能はざる所であります。之に由って觀れば、神道や儒教に代つて、日本國民の靈性より發生する新宗教の出現を豫期せずしては居られませぬ。」³⁹

1936年、朝鮮で行われた「新日本精神」の講演録を見ると、この章のタイトルが「眞の宗教家黒住宗忠」となっており、海老名が「天照大神」を重視する黒住の教えによって「天御中主神」の限界を乗り越えようとしていた点が確認できる。⁴⁰

「天御中主神の所に還つて行つた敬神の精神が、神武天皇に還つて新たになつて來た所の新日本の新しい精神になるべきものであるといふ考へでありました。……それは今日謂ふ所の宗教神道(神道を神社神道と宗教神道とに分けて分り易く言つてをります)とは黒住教の如きものを指て申しますが、その教祖黒住宗忠は洵に偉い人で私から見ると本當の宗教家である。私などは肚のドン低から共鳴する所の人でありますが、黒住宗忠は天照大御神を高調してをります。けれどもそれは日本の古典にある大日靈貴神おはひるめむちのかみぢやない。かう言つたら反對される方があるか知れませんが、……天照大御神は世界、宇宙を照らし給ふお方である。」⁴¹

海老名は天御中主神崇拝が持っている限界を言及した後、宗教神道(教派神道)の意味と天照大神の存在を強調した。明治維新前後、国学者たちと唯物主義に妥協した学者たちによって強調された「天御中主神と神武天皇」は政治性と倫理性にとどまり、單なる過去回帰になつてしまつたとする。その結果として欠けている宗教性を充たすためには「天照大神」の存在が必要であるが、ここでまさに黒住教の教えとキリスト教の神概念が必要であると考えた。

海老名は八百万神の多神教社会から天御中主神の一神教社会への進化発展には基本的に同調する。⁴²しかし、欧米を意識した唯物主義的なアプローチは神道を非宗教にしてしまい、

³⁹ 海老名弾正『新日本精神』滋賀、1935、41.

⁴⁰ 「日本は根底から生れ變ること出來ると考へた。……紀元節は明治になつてから始まつた大祭日でありませぬ。……どこまで反るか。それは精神的にもう少し深い所である。敬神である。天御中主神まで還なくてはいけない。」(海老名弾正「新日本精神」『朝鮮講演』、1936、9.)

⁴¹ 海老名弾正「新日本精神」『朝鮮講演』、1936、10.

「天が御許しにならなければ禱る所はない。……政治の立て方の上から一神教になつて居るのであります。是が淡窓がずっと論じて行く所、……八百萬の神々があるとした所が、それには餘り引掛らない。其の根本義は即ち天を敬ふ、天の許しを受けるより外にはない。」

⁴² 海老名弾正「第二講新日本精神に就て」、1937、22.

結局、水戸学のような閉鎖的な思想に陥って過去回帰的退行に留まる可能性があると考えた。

43

関岡は海老名が言う「一神教」について神道の「天御中主神」と「天照大神」を挙げ、「天神＝天御中主神＝宗教」とし、「皇祖（天祖）＝天照大神＝国民道徳」であると区別して理解する。⁴⁴しかし、海老名の黒住教理解や晩年の「新日本精神」の言説をみると、「天御中主神＝観念上の造物主＝倫理道徳」と「天照大神＝現実上の造物主＝宗教」という正反対の理解がより正しいと考えられる。それは神道学者、真弓常忠が「日本人の神観念の中に、抽象的な超越者、唯一絶対者というような存在を意識した例が全くなかったわけではない。例えば『古事記』の冒頭には『天地の初発の時、高天の原に成りませる神の名は』として、天御中主神という、かなり観念的な神の名を掲げている。しかし、天御中主神は日本の社会の中では、神社の祭神として祀られることはなかった」⁴⁵と語るように、現実の宗教の場では天御中主神より天照大神がより宗教的な崇拜対象とみなされていたという点は、海老名も深く感じていたはずである。すなわち海老名は、観念的な倫理道徳としての「敬神」と繋がる神概念を「天御中主神」と考え、民間の宗教性を確保するため地上の天皇と繋がる天上の「天照大神」を宗教的な対象として考えたからである。

3. 海老名が見た「黒住教」の核心内容とキリスト教

3-1. 日本における真の唯一神概念と「天照大神」

「天御中主神」を重視した国学者出身のキリスト者松山高吉と異なり、海老名は「天照大神」を特に強調した。すでに「神道の宗教的精神」（1897）で、海老名が「多神教は古代の神道にして、一神教は近世の神道なり、神道本来一神教の種子なかりしにあらず、古典に造化の三神は造物主として示され、天照太神は高天原の主宰として教へられたり」⁴⁶と語っており、松山とは異なる姿勢を示している。「国体新論」（1898）でも海老名は「我国体とは、日本帝国の東洋に巍々蕩々として万国の比類を脱し天壤と窮りなく万世一系の皇統を奉獻する国柄たる。……皇道赫々万国を照らすこと吾国家の理想たる、天照大神の盛徳に恥ぢざるものあるべし」⁴⁷と言及しながら「天照大神」を皇統や皇道の理想として強調しつつ、国体の神道的な根本要素として到達させようとしていた。つまり、松山は神道の第一期の「造物主」に主な関心を持つが、海老名は第三期の「天照大神」への祭祀慣習と崇拜に寛容的・積極的な関心を示していると言える。

⁴³ 海老名弾正「第二講新日本精神に就て」、1937、30.

⁴⁴ 関岡一成『海老名弾正』、434、448-449.

⁴⁵ 真弓常忠『神道の世界：神社と祭り』大阪：朱鷺書房、1984、43.；関岡一成『海老名弾正』、551.再引用.

⁴⁶ 海老名弾正「神道の宗教的精神」『六合雑誌』第198号、1897.

⁴⁷ 海老名弾正「国体新論」『六合雑誌』第210号、1898年6月25日、5-10.

このように海老名が「天照大神」を特に重視する背景には、海老名が代表的な教派神道である黒住教に魅了されたことと関係があるように見える。海老名が執筆した『基督教の観たる黒住教の真理』（1898）において、一貫して黒住宗忠の教えを高く評価しつつ「天照大神」の存在を強調している。

「宗忠は安永九年(1780年、筆者註)十一月二十六日……に生れたり当時海外の事情に通達せる……國學復古の大祖本居宣長は宗忠に長せる事五十二年にして平田篤胤は僅に四年なりき篤胤は東西兩部に於て帝國の古道を説き……其時宗忠備前の僻村に於て篤く天照太神の開運を祈り修行大に積んで深く神明の境域に入り……天照太神の大道を説き人々の疾病を癒し」⁴⁸

海老名は本居・平田による復古神道が日本帝国の古道の価値を再発見させた貢献を前提として述べた後、その次の時代を準備した人物として宗忠を挙げ、「天照大神」への彼の宗教的体験を紹介する。

海老名は宗忠が太陽と八百万神を拝む先祖の姿に基づいて、14歳の頃「天照大神」と出会い、神明の境地に至ったと評価した。⁴⁹ そして天照大神の恵みで病者を治療する活動を始めた宗教的側面を紹介した。⁵⁰ 海老名の説明によれば、天照大神の啓示は八百万神と連結される通路である。⁵¹ 「万物は米」であり「天照大神は杵」⁵²であるという比喻で、海老名は黒住が日本宗教の多神教的要素と断絶せず、一神教への進化発展を試みたことに注目したようだ。次のように黒住の神論は「一神教」と「多神(万神)教」との合一であり、それを可能にするのは、既存の国学者たちが強調した「天御中主神」ではなく「天照大神」である点を明らかにしている。

「黒住教の崇敬する所の神は天照太神なり此神は八百萬神の妙元なり神明の本の主なり萬物の親神なり天照太神は根本也八百萬神は枝葉なり教祖曰く八百萬神と申ても本體は

⁴⁸ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、1898、4。

⁴⁹ 「尊信する太陽を拝し亦八百萬神及故父母の靈に今世の別を告げ従容として……教祖宗忠三十四歳にして始めて神の境涯に到達せしの時なり」（海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、6。）

⁵⁰ 「我家の主人は神なりと言ふらせり是れ宗忠奇跡の始めなり……宗忠は處々巡廻して天照太神の恩恵を説き病者を癒し……忠孝の道を宣べ生通しの神術を傳へたり」（海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、7。）；「天照太神の御徳を宣へ病者を醫し狐狐を逐ひ死者を活し大に黒住教を弘めたり」（同書、12。）

⁵¹ 「天照太神の啓示なる故に八百萬神謹で聞き給へりと斯く日神の黙示を説教せしことなれば……眞に普通人民の師表とも云ふべき」（海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、8。）

⁵² 「萬物は米なり天照太神は杵なり萬物皆天照太神につかれて精々化醇しつゝあるなり……實に太神の分靈に對し恐れ多き事言語の盡すべき」（海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、9。）

一體也一本の大木の如く根は則ち一本なれども枝葉段々に分れて皆悉は八百萬神なり其の大元の根の神は則ち日神天照太神也一神萬神萬神一神といふて萬神は一神の中に存在し一神は萬神の上に有り……宗忠曰く「日神の中には八百萬神も一切御座て其内の本主たるが天照太神也」⁵³

田中は「天照大神の神徳を……體現し、天照大神に歸一するを『生物を捉ふ』と云ふ」⁵⁴とし、天照大神への「歸一」が黒住教において重要であると強調する。さらに海老名は「八百萬神謹んで天照太神の詔敕を聽聞し玉ふ」という宗忠の言葉を引用し、多神教から一神教へ帰結を強調する。⁵⁵ 結局キリスト教の神のような「天照大神」との繋がりの中で、聖靈のような「八百万神」は人々のために存在するという「天照大神歸一論」を述べている。⁵⁶ ここで「父・子・聖靈」と「天照大神・天皇・八百万神」という三位一体的な発想を可能にする出発点が見つけられる。宗忠は聖書の預言者のように人々を天照大神に導く存在として描かれる。⁵⁷

このように、日本固有の神概念の中心に国学者たちが強調した「天御中主神」ではなく黒住宗忠が強調した「天照大神」が置かれることで、海老名は拒否感なく積極的に受け入れている。東京帝大の田中も次のように皇祖神としての「天照大神」が古典上の観念的な「天御中主神」の表現であるので、そこに「歸一」する原理を述べているが、海老名と類似する説明である。

「宗忠の思想に於いて、終始一貫する所のもの、亦天照大神である。天照大神は、勿論、我が國の、皇祖神にましますも、その神靈は、古典に於ける、宇宙の本體神たる天御中主神の表現にましますのである。宗忠は、かゝる天照大神に於いて直に本體神を認識したのである。されば彼れにあつては……天も、天地も、天命も、皆天照大神に歸一するのである。のみならず、道も、誠も、心も亦、皆、天照大神に歸一するのである。」⁵⁸

⁵³ 海老名弾正『基督教の觀たる黒住教の真理』、20.

⁵⁴ 田中義能『黒住教の研究』、26.

⁵⁵ 「宗忠答て曰く「八百萬神謹んで天照太神の詔敕を聽聞し玉ふ」宗忠八百萬神を觀ること如此彼れ何ぞ平身低頭萬神に祈禱することを爲んや」（海老名弾正『基督教の觀たる黒住教の真理』、21.）

⁵⁶ 「教祖の説教に曰く「日月八百萬神は一切の衆生を助けやうと思召幸福をあたへやうとおもひ病有る者は平癒させ邪惡と申ものは少しもなく八百萬神は天照太神の聖旨を奉戴して人々を助け玉ふことなれば人若し罪を天照太神に獲るときは八百萬神も之を救ふ事能はざるべし」（海老名弾正『基督教の觀たる黒住教の真理』、21-22.）

⁵⁷ 「黒住教會は何れも神床の中央に天照太神を祭り左には八百萬神右に宗忠神を祭れり其本主とする所は中央の天照太神なり宗忠は人々を天照太神に導く所の案内者なり八百萬神は敬虔者を守護する爲に遣はされたる太神の使臣なり」（海老名弾正『基督教の觀たる黒住教の真理』、21-22.）

⁵⁸ 田中義能『黒住教の研究』、37.

1898年に現れた黒住教に関する海老名の積極的な関心は、約40年後の1936年に朝鮮の京城で行なった「新日本精神」という講演で「天照大神と絶対の歓喜」という小タイトルによってより鮮明に語られる。ここで海老名は、天照大神は歴史上に存在せず歴史を超越した宇宙的な存在であることを強調し、黒住教の宗教的体験を強調する。

「おはひるめむちのかみ大日靈貴神(=天照大神、筆者註)は、宇宙を照らしてをる方である。古事記などに就て見れば天御中主神のことだとあの方面の人から聞かされたことがあります。何しろ宗教的体験はこゝである。その神と一つになれば、『生通し』なり、死ぬことはないといふのが黒住宗忠の信仰であります。『天照す神のみはらに住む人は寝ても覺めても面白きかな』と歌ってをる。天照大御神の懷に住んでをる者には絶対の歓喜がある。これは歴史上の話ぢやない。歴史を超越した宇宙の消息である。」⁵⁹

ここに登場する『生通し』という表現は、黒住教の代表的な用語として40年前海老名が執筆した『基督教の觀たる黒住教の真理』にも頻繁に登場する。⁶⁰ 田中も『生通し』が「永久の生命を得るもの」であるとするが、その理由は「天照大神を體現するからである」⁶¹と説明する。天照大神と一体となる「體現」という宗教的体験について田中も次のように強調して、非宗教として倫理化していた神社神道の欠けている部分を黒住教の「天照大神との一体論」によって補完できると考えた。これは海老名と類似する観点である。

「宗忠は、在来の日本神道の革新者として現れたわけである。つまり、固定化せんとしていた日本神道に、豊かな宗教的内容を与えたのである。何といつでも、それまでの神道思想というものは、煩鎖な習合的なものか、又は著しく理論的に偏して、生きた実感体験の宗教というものではなかった。日本の神道が、立派な宗教として生まれ出づるためには、実に宗忠の、血のにじむ人生体験を必要としたのである。」⁶²

⁵⁹ 海老名弾正「新日本精神」『朝鮮講演』、1936、10.

⁶⁰ 「天照太神の恩恵を説き病者を癒し……忠孝の道を宣べ生通しの神術を傳へたり」(7)、「天照太神を信じ其御徳を宣傳し人々をして生通の幸福に入らしむるを以て自己の天命を識認せり宗忠日神を觀ること」(13)、「天照太神と親子同氣同脉一心一體にして生通しの境涯に達する事を確信す故に」(13)、「大神之を憫み玉ひ宗忠に宣託して療養を行ひ生通しの幸福を教へ其徳を顯はさせ玉ふ」(14-15)、「天照太神の分心にして生通しに活るものなり」(30)、「宗忠詠じて曰く『限りなき天照太神と我心隔てなければ生通しなり』」(38)、「日神の教は……外國人をも教へ諭して等しく生通しの恩澤を蒙らしめんが爲なり」(40)、「永遠限りなく生通しに活ながらへて不老不死たるを得是れ信心の賜なり」(51)；以上、海老名弾正『基督教の觀たる黒住教の真理』から引用.

⁶¹ 田中義能『黒住教の研究』、23.

⁶² 延原大川『黒住宗忠とその宗教』、9.

このような「宗教体験」を強調した「心田開発運動」に協力するため渡韓した海老名は、講演で次のようにこの世界を照らす神はただ一人、まさに天照大神である点を強調し、これが明治維新の時に日本思想界の動きであり多神教から一神教へのこのような進化発展の過程があったため、その上でキリスト教を根付かせることが出来たと述べている。

「凡てのものを照らしてをる神は一つであると主張してをる……以上が王政維新當初の我が國精神界の動きであります。みな一神教になりつゝある。……キリスト教が世界に稀れなる成績を日本に現はしたのである。なぜならばキリスト教の信仰はチャンと日本人の精神上に土臺が出来てをる。」⁶³

海老名は、説教「復活の福音」(1907)でも「私は、今朝天照大神が天岩戸あまのいはとを出て來たり給ふ光景を讀んだのですが、實に美はしきものである、……天地は再び愉色を湛えて舊の喜樂を取り回へした、……これは榮えある生命である」⁶⁴と、「天照大神」を一貫して重視している。

もちろん、海老名は「天照大神」以外にも儒教の「上帝」、神道の「天御中主神」などを日本宗教の一神教的な進化発展に貢献したものと認め高く評価している。⁶⁵しかしどこまでも、それらは「旧日本精神」に基づいた狭隘な「国家神道」の次元に留まる神概念であるため、乗り越えるべき対象であった。なぜならば倫理道徳のみを強調した「国家神道」としてあるべき宗教性を失い、帝国各地にまで「日本精神」を拡大し扶植することが出来なくなると考えたからである。したがって海老名は、いわゆる「造化の主宰神」の中でも「天照大神」を特に強調し、その下部に置かれた八百万神との関係を「本来、君臣、親子」の関係として理解し、現存する天皇がこの「至尊至聖名くべからざる天神の皇孫」⁶⁶であり、神道は皇権国権の擁護者たる大任を持つと主張することになる。このように「天照大神」に着目する姿勢は渡瀬常吉など海老名の一部の弟子たちによって継承され、さらに急進化して行く。これは創造神(根本神)としての「天御中主神」に力点を置いた松山とは区別される異質な神道理解であり、倫理化されている「天照大神」の宗教性をも現すことによって神道や日本精神に慣れていない植民地にまで「国家神道」の理想をうまく植え付けようとすることになる。後述するが、これは「国家神道」の範囲を越えて「日本帝国=神の国」の絶え間ない拡張を達成するために植民地で行われた「帝国神道」の試みと繋がる立場になる。

海老名が「新日本精神」運動を展開し「天照大神」を強調した黒住の教えを再度言及し

⁶³ 海老名弾正「新日本精神」『朝鮮講演』、1936、11.

⁶⁴ 海老名弾正「復活の福音」『新人』第8巻第5号、1907年5月、6.

⁶⁵ 金文吉『近代日本キリスト教と朝鮮』、76-77.

⁶⁶ 海老名弾正「神道の宗教的精神」参照.

た1936年頃、いわゆる「日本的キリスト教」運動が盛んになるが、そこではキリスト教の「ゴッド」が「天照大神」であるとの宣言が増え、これは黒住教とキリスト教の接点を主張した海老名の観点に同調するものとして考えられる。

「国が大事か基督教が大事かと問はれた時、基督教は何と答へるか。基督教は決して国家の贅沢物であってはならない。……日本の基督教よ、国民意識の底流に下れ！歴史あって二千五百年、国民久遠の生命がおし流す歴史の内なる『かみ』と結びつけ！そこに汝自身のエホバ神の現実在を見出し得ないならば、寧ろ汝自身のものを捨つべきである。エスの曰く、天国は網の目にも、鋏の先にも、地上の至る所に天国の神の示現はある筈である。『大日如來』それは『天照大神』であると佛僧行基は奈良大佛の縁起に云ふた。国民宗教の先輩としての佛教が、千年の昔に踏分けた棘の道を、今亦吾が基督教が辿らねばならぬ。それは實に基督教が日本の宗教に成り切る出発点だ。」⁶⁷

3-2. 神人の親子関係回復

海老名が宗忠の思想を積極的に受容し内面化した理由の一つとして、海老名がキリスト教に入信した時に神との人格的な関係により宗教的に深められ「親子関係としての神人関係」を結んだ第二次回心を考察する必要がある。海老名は『基督教本義』などで神と人間が人格的な「父子関係」を結ぶ中で物質的な関係性を脱却し、靈的な「神人合一」による「人格完成」が達成できると考えた。⁶⁸この観点に基づいて、彼は「天照大神」との関係形成も理解している。

「神と人とは父子の親しみ有り人は何の疑念もなく子が親に任するが如く我を離れて天地に打任せ……神は父母なるが故に慈に満ち玉ひ……宗忠詠じて曰く「限りなき天照太神と我心隔てなければ生通しなり」⁶⁹

海老名は天照大神との関係においても「隔」のない親子関係を求めた宗忠の教えを引用し

⁶⁷ 浜田本悠「甦生基督教の根本問題—日本人の神・日本人の聖書問題—」『宗教公論』53-54. ; 関岡一成『海老名弾正』、375. から再引用。

⁶⁸ 「神は人心を通じて顯現し給ふかな義理の觀念め明晰なる心よりは天地の公道正義を示し、……宇宙の仁愛恩恵を現はし給ふのである。……愛情の心緒は遂に神民父子の親愛を感發するに至つた。抑神民父子の関係は各國民の殆ど齋しく有する宗教觀念で、ペニケ、ギリシヤ、モアブ、アスシリアの如き民族は……父子は即ち神は造物主にして、人は受造物たる関係より發した……物質的であつた。ホゼヤが成發した神民父子の觀念とは……物質的に非ずして道義的である。」(海老名弾正『基督教本義』東京：日高有倫堂、1903、27-28.) ; 「神的基督に同化して、其天父と號叫し給ふた所の同一の神を亦同一の靈を以て天父と號叫するを以て、基督教徒獨特の權利と心得て居つた」(海老名弾正『基督教本義』、148.)

⁶⁹ 海老名弾正『基督教の觀たる黒住教の真理』、38.

ている。結局これは神との合一を試みるまでに至る。更に海老名は「天照太神と親子同氣同脈一心一體にして生通しの境涯に達する事を確信す故に何の時代と誰も人々我を離るゝ時は神代なり」⁷⁰と説明し、天照大神との親子関係を回復させることは神代の再現であると強調した。そのように親密な神を「親神たる天照大神」⁷¹と表現している。海老名が「一心一体」あるいは「一心同体」と表現した天照大神との合一について、田中は「吾人は天照大神を同魂同體であつて、無限の生命を有し、無限の生々發展を遂げ、一切何事も成就しないものはないとして居る」⁷²とし、「同魂」という表現を使っている。延原も抽象的な神ではなく、具体的な日常の神としての「日月＝天照大神」との合一のため神と人間両者の「心」の結合を宗忠が強調したと、次のように述べている。これは「宗教的体験」の価値に注目した海老名と重なる部分である。

「宗忠の宗教思想の特色は、抽象的な神を説かない点であり、科学的な根拠をすら含んでいることである。宗忠の神は、単純にいて、生のままの最も具体的な天地日月である。……宗忠の信ずる天照大神が、単なる宇宙の主宰神というような抽象的な理神であれば、格別のことではない。そうではなくて、生きている人間と日々対面し、直接人間に生気を与えている太陽の徳そのものの中につかまえられた神であるところに、宗忠の価値がある。また、禅宗で、究極のより処となっている『心』を、不可得のものとせず、はつきりとその来所をつかんでいる……宗忠は人間の心を大切にすることで、稀有な人であった。」⁷³

そして海老名は、このような「心」の合一、すなわち「一心」に基づいた神との親子関係を聖書の「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」（ヨハネ15:5）と類似する比喩で説明する。すなわち「天照大神」と「八百万神」と「人」は「木と枝と葉」として繋がっている関係であるとする。

「八百万神と申ても本體は一體也人も其通り幾千萬人といへども本は只一人也……一本の大木の如く根は一本なれども枝葉段々分かれて有れば皆悉八百万神也其大元の根の神は則ち日神天照大神也人と申は日神也」⁷⁴

⁷⁰ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、13.

⁷¹ 「親神たる天照太神を教示するに當り人々の機根に應じて日月といひ天地といひ日月天地といひ神地日月と云ひ太陽といひ且見るべき」（海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、23.）

⁷² 田中義能『黒住教の研究』、24.

⁷³ 延原大川『黒住宗忠とその宗教』、18.

⁷⁴ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、40.

海老名は、肉体の父母への孝より、大父母である「天照大神」への根本的な忠孝がより重要だとし、⁷⁵このような「神と人の関係」は「人と人との関係」まで拡大され、個人的「親子」関係から世界的な「博愛思想」に展開して行くと考えた。

「人は神の子なれば相互に兄弟たるは宗忠の明に識認……我も人も天地の子也……四海の内皆兄弟也同天より恵を受人となり」⁷⁶

3-3. 黒住教の倫理性：海老名の人格完成と神人合一

海老名は教派(宗教)神道である黒住教が、倫理道徳的な面においても神社神道(国家神道)に匹敵すると考えた。海老名は黒住教が「宗忠身自ら深く感ぜし所たるべし故に其博愛や敵にも及びしなり……人々一體禍福共有の理を示し」⁷⁷ていると述べ、聖書の「隣人を自分のように愛しなさい」(マルコ12:31)というキリスト教の隣人愛思想との類似性を見つけようとした。

海老名は黒住教における天照大神の原動力になって、人間の欲望を統制できる倫理性がある、と高く評価する。⁷⁸そして黒住教の四徳を「神徳、面白、正直、仁愛」と提示している。⁷⁹

海老名は生涯一貫してイエスを模範とする「人格完成」によって一人一人の人間が完全な状態を目指して尽力すれば、この社会に神の国が建設されるという理想を持っていた。そのような人格向上の道は、「東方教会」を代表する教父、アレクサンドリアのクレメンス(Titus Flavius Clemens)やオリゲネス(Origenes Adamantius)のロゴス的な神人合一観、⁸⁰

⁷⁵ 「大父母とは天地の大本たる天照太神なり宗忠は此天照太神に對する忠孝を以て根本的大忠孝と教へたりき……此根本的忠孝確率する時は五倫五常は自然と行はれずと云ふ事なく本位で道生す」(海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、47-48.)

⁷⁶ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、39.

⁷⁷ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、39.

⁷⁸ 「教祖曰く人欲を去り正直に明かなれば日神と同じ心なり正直の誠は則ち天照太神の御心の本體萬物生々の元氣なり」(海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、27.)

⁷⁹ 「天照太神の御徳は教へ來れば夥多あるべけれども前述の四徳は最も黒住教の主張する所なるべし」(海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、29.)

⁸⁰ 海老名弾正『基督教本義』東京：日高有倫堂、1903. には、西方教会のアウグスティヌスと共に東方教会の教父、特にオリゲネスの言及が頻繁に登場する。ロゴス概念に基づいた神人合一観について海老名は次のように述べている。；「ロゴスは萬有に遍在して之を統一し之を指導して神と合一ならしむるからである。故に眞理の本質が基督の顯現以前に存在せずと想像する……オリゲネスはロゴスを以て一個の實在者と認定する……ロゴスが耶蘇の人格に由て顯現し給ふまでは、パウロもペテロ神を造物者として、亦萬有の主宰として、之を認めたのであったが、神子ロゴスに由て始めて神を父として、認むることを得た。」(海老名弾正『基督教本義』、183-184.)；「人の尊大を其自由意志に見出したるオリゲネスの最も主張する所である。……其意志はロゴスの意志に合同一致するを以て、無上の幸福となし居たるを以て、彼と此

あるいはマイスター・エックハルト (Meister Eckhart) の神人合一説、その後のドイツ・自由主義神学などからの影響が土台になったと考えられる。海老名の著書『基督教本義』には次のように「神人合一」の可能性について強調した部分が頻繁に登場する。

「耶蘇と人類とは同血同情のものである、して亦耶蘇の神的性能も凡て彼を信ずる者に分與せられ、彼れが此神的性情を以て全く靈人たるを得た通り、……此同一の性情に由つて全き神子たるを得る。」⁸¹「信仰は人をして基督に合體し同化して其聖なる人格を實現せしむるもの、……基督に同化する者は、既に其内部に永久發生すべき靈能を有するもの、其理性は神靈に觸れて勃興し、……歡喜して天を仰ぎ、アパ父と呼することを得るのだ。……神と父子有親の關係を完成するに外ならない。」⁸²「基督と合體し、天父と合體して居るものなれば、其個人的ならざるは推して知るべきであろう。……神的品性をも分ち有するのであ、基督の教會は則ち神靈の住する神殿である……神に結合するので、勢ひ世界人類と親密なる社交に入らざるを得ない。」⁸³

ここで海老名は黒住教においても「天照大神」との合一などを試みた点に注目している。人の疾病を癒すため「神となるの道を尋ね」⁸⁴る宗忠の姿に従うべきであると強調する。

「人」という章において、海老名は黒住教の人間論について説明する。海老名は「人と日の神……一體も是故に本當の人は日の神より外になり」という宗忠の話の引用し、次のように一人一人の人格は、神聖を持つ貴い存在であり、日神(=天照大神)の心を内面化してその御心を持つとそれが人であると説明する。

「人は元來日神の事なれば天地萬物よりも神聖にして貴きものなり……世の中に……生活する人物は日の神の御心を受得て生れたるが故に人とはいふなり教祖曰く人と申すは日神也世上に顯はれ出たる人も皆々日神の心になれば則ち人なり」⁸⁵

「神と人との關係」という章においては「神と人とは最親最密にして本來一心同體なり」⁸⁶とし、「神人同體説」すなわちキリスト教が言う「Imago Dei」のような議論を展開する。

とは互に同化して居ったロゴスは其の本來の性格よりして自から受肉することは出来ないのだが、人靈は受肉の更を有する。」(海老名弾正『基督教本義』、188.)

⁸¹ 海老名弾正『基督教本義』、105.

⁸² 海老名弾正『基督教本義』、111-112.

⁸³ 海老名弾正『基督教本義』、115.

⁸⁴ 「神道を陳べん欲すれば……宗忠弱年の時ふり篤く天照太神を尊信し自らも神とならんことを希ひ……神となるの道を尋ねたりしも……」(海老名弾正『基督教の觀たる黒住教の真理』、5.)

⁸⁵ 海老名弾正『基督教の觀たる黒住教の真理』、29.

⁸⁶ 「神と人とは最親最密にして本來一心同體なり教祖曰く神人一體と申て或は神様の佛様の聖人のと申て何

そして「神人二物」という錯覚から脱することを願い、「神人同体」すなわち「Imago Dei」を忘れると未だに原始的な神代に留まると断言する。

「神人二物と誤り……心のみにして形を忘るゝ時は今も神代なるべし」⁸⁷

「日神と一心同體たるものほど天地に尊きもの」⁸⁸になり、「真の本体」は天照大神であり、「神は本であり、人は末である」⁸⁹とし、キリスト教の神秘主義のような議論を行っている。しかし、そこでの神は天照大神である点が異なる。

このように自らを「日神」すなわち天照大神の分御魂であることを悟り、再びその本体と一体(合一)になると、⁹⁰「正直・面白・仁愛」などが自然に外に溢れ出て、⁹¹誠の人間になるのは天照大神の御徳によって可能であると、海老名は説明している。⁹²

「修行」の章においては、このような人格完成のため黒住教が人倫と人道のための倫理的な実践を求めていると強調する。しかし、宗忠が教える修行は既存の儒教学者の教えとは異なる点を明らかにして距離を置く。⁹³黒住教における「神人一体」は、「天照大神との合一、一心同体」であり、その中で誠の信心が発生し祭礼儀式等の外形作法では誠の信心が発生しない点を強調する。それは神明である天照大神との默契に基づいて行われることであるからだと説明する。⁹⁴海老名は「敬神の精神」を「天地神明」の考え方であり、それは「天地の主宰」であると述べているため、「敬神」精神も黒住が言う「神明の本としての天照大神」と繋がっていることが分かる。

も隔の有物にてはなく神も人も一物一體にして其活物は一體なり活ものは日神也日神即ち天照太神也人々形體を忘れ心の本體に立戻るときは則ち神人不二の境涯に達すべし」（海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、37.）

⁸⁷ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、37.

⁸⁸ 「日神と一心同體たるものほど天地に尊きものはあらざるなり……天照太神の分心にして生通しに活ものなり」（海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、30.）

⁸⁹ 「誠の本體が直に天照太神と御合點被下候……誠の本體が直に天照太神」（海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、37.）

⁹⁰ 「日神と一體たるの道なり」（海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、32.）

⁹¹ 「人は日神の分御魂にして其本體たるや直に天照太神なれば其の神徳とする所のものも……日神の盛徳と同一たらざるべからず故に……正直面白仁愛等に外ならざるべし」（海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、31.）

⁹² 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、36.

⁹³ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、46-47.

⁹⁴ 「神人一體の境涯に達するときは萬物一新しーとして善ならざるはなく……天地の本體天照太神と一心同體ならんと欲せば信心の誠を發せざるべからず祭禮儀式の如きは外形の作法にして信心の誠にはあらず信心の誠は形もなく聲もなき心なり……神明の本の主たる天照太神と默契するにあり」（海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、49.）

「王政維新の變換期に於ける日本人の敬神の精神がどんな風であったか、天地神明に對する考へ方が……林羅山は非常に敬神家であつて、……その敬神家なる羅山は、……人間の體に魂のあるが如く、天地にも魂がある、それが即ち天地の主宰だる、……宇宙を支配してをられると明かに断言してをる」⁹⁵

この40年後、朝鮮で行われた「新日本精神」という講演では、次のように黒住教の天照大神が次のように「正義」の神であると同時に真の神であると力説している。

「その神は正義である。正しい神である。誠の神である。故にその神の御前に向つて恥ぢないのが人の心の誠であると仰せられ……その神の思召の深い精神に通ふ所のものが人の心の誠であると仰せられ……故に人間の有つてをる眞心、最も清い、最も素直な、偽りのない精神そのものと通ふ所の神明である」⁹⁶

倫理性が欠乏していた古い神道の神々と比べ、黒住教の神概念には日本における唯一神教的な進化發展の結果として、その倫理性も完成の段階まで至っているという信念を強調しているのである。

3-4. 黒住教の樂天主義と「神の国」理想

田中は「天照大神の御心を體すれば、即ち神明となり、ありがたき世界は現前し、心安き高天原は茲に見らるとする」⁹⁷とし、黒住教の「神国」の理想を表現している。ここで表現された「心安き高天原」は海老名が宗忠の思想に傾倒した大きな部分である「樂天主義」と関係があると考えられる。海老名は「黒住教が大陽に於て人々の陽徳を養成するは則ち神道の神道たる所にして月輪に於て心を寫す佛教と大いに其主義を異にし樂天と厭世と天地懸隔す」⁹⁸とし、仏教と異なる黒住教の樂天さが最も神道らしい所であると評価した。海老名は輪廻史觀に基づいて、現実の改善や發展に消極的になり苦行を美德として考える仏教式の悲觀主義には批判的であつた。海老名は『基督教本義』においても「耶蘇の樂天主義は……厭世主義を反撃して、別に光明の天地を見開きたる樂天主義であるから吾人は其主義が永久の勝利を全うすることを信じて疑はない」⁹⁹とし、イエスの教えの核心的な性格として樂天主義を示した。一方、樂天主義を選び、癒しと神人一体を通して「樂天安命」の「安樂世界」

⁹⁵ 海老名弾正「新日本精神」『朝鮮講演』、1936、6.

⁹⁶ 海老名弾正「新日本精神」『朝鮮講演』、1936、5.

⁹⁷ 田中義能『黒住教の研究』、29.

⁹⁸ 海老名弾正『基督教の觀たる黒住教の眞理』、25.

⁹⁹ 海老名弾正『基督教本義』、97.

¹⁰⁰の形成を試みた黒住教については魅力を感じたと考えられる。海老名は、下記のように宗忠が仏教と正反対であると評価している。

「宗忠の人生観世界観は佛者のとは正反対なり彼れは其面白く楽しく嬉しく勇しく難き生々限りなき日神の心を以て世界を觀せり而して又天地萬物は日神の面白く楽しく嬉しく勇ましき神業なり……其の人生観世界観は純乎たる樂天主義なり」¹⁰¹

そして、海老名は、「宗忠は形を殺して心を生かさんと企てし厭世苦行の稱導者にあらず寧ろ心を以て形を生かさんと企てたる樂天安行の君子なり」¹⁰²と述べ、心で体を生かす人こそ君子であると強調し、既存の儒教の君子が欠けていた様子乗り越えようとした。

このような世界観は、この世での「神の国」実現の理想と繋がる。「高天原は日前に顯然たり」¹⁰³ という表現のように、「我一心を以て地獄にも極樂にもなる事なり……教祖詠じて曰く『有無の心生死の海を越えぬればこゝぞ安樂世界なり』」¹⁰⁴とキリスト教が言う「神の国」への希望を「安樂世界」という理想として待望している。これは、社会進化論的な観点に基づいて、神代と異なり毎日変化し、発展が行わなれる状況と前提とする。心(観念)のみで形(実現)から離れると神代に留まるという「樂天主義」を強調する。

「此世は獨り古への神代と異ならざるのみならず日に新にして又日々に新に益進歩しつゝ有なり……心のみにして形を離れたるときは今も神代なるべし」¹⁰⁵

『基督教の觀たる黒住教の真理』(1898)の最後の頁には信仰生活の中で注意すべき内容がまとめられた「黒住教の七誠(七ヶ條、日々心得の事)」が紹介されている。その第一條が「神國の人に生れ常に信心なき事」¹⁰⁶である。このように黒住教は「神の国」の実現と完成という教理的な目標が明確であり、それを達成するための個人的な次元の樂天主義は、四海兄弟を念頭に置いて布教する黒住教の博愛主義に拡大して行く。¹⁰⁷この理想は海老名が強調

¹⁰⁰「神明の本の主天照太神と同席たるが至善也此至善が即ち安樂世界なり高天原なり神人不二幽顯一致人々誠と一體たる時は……眞理に一致すべきなり故に聞者我を離れ天照太神と一體となりて聞く時は則ち必ず亦我を離れて天命を語る所の宗忠の言を眞實とすべし」(海老名弾正『基督教の觀たる黒住教の真理』、18.)

¹⁰¹ 海老名弾正『基督教の觀たる黒住教の真理』、33.

¹⁰² 海老名弾正『基督教の觀たる黒住教の真理』、46.

¹⁰³ 海老名弾正『基督教の觀たる黒住教の真理』、32.

¹⁰⁴ 海老名弾正『基督教の觀たる黒住教の真理』、32.

¹⁰⁵ 海老名弾正『基督教の觀たる黒住教の真理』、34.

¹⁰⁶ 海老名弾正『基督教の觀たる黒住教の真理』、59.

¹⁰⁷「日神と共に活動して限りなく死ることなく四海の内も此正直の誠にて統一せらるなり……教祖曰く「誠

して博愛主義にも影響を与えたように考えられる。

海老名は黒住教が言う「神国」の概念について、具体的な説明はしていないが、宗忠は「万世一系の天皇の連なる天照大神」を強調したので、『教書』の「門人名所記」において「我皇国の神道当時微にして儒榮へ仏盛なるも三才自然の時なるのみ」¹⁰⁸ とし、自らが言う「神国」が「皇国」を前提としていることを暗示している。そして天照大神を天照「皇」太神と表記した書簡もある。¹⁰⁹ 田中も、宗忠の「神国」の中心に「天照大神」を置いて、結局「日神の本つ御國と皇國」^{ヒノガミ}である点を明らかにしている。¹¹⁰ 宗忠には「天照大神が統治する日本は輝ける国であるとの絶対的意識があった」¹¹¹ ので、その天照信仰は神道国教化政策以後、神道を通して国民および植民地民教化を行おうとした明治政府と黒住教を結びつける原因になった。この関係性は、昭和期にも植民地におけるいわゆる「帝国神道」的な信仰動員運動の政策の中でもう一度活性化する。「朝鮮伝道論」を提唱した海老名はこのような黒住教の「神国」概念と自らのキリスト教における「神の国」観念を結合させ、「帝国神道的」キリスト教を試みる。

3-5. 「天照大神」の世界性・普遍性と博愛主義

海老名は「神は猶太教の神より大轉して基督教の神となつた。民族を偏視することなく、普く世界人類を愛して偏きょうあい偏頗なく……憐憫する恩愛の神となつた」¹¹²とし、閉鎖的な民族宗教であったユダヤ教が、普遍的・博愛的な世界宗教として発展して来た歴史を繰り返して強調した。この観点から見る時、神道という宗教もユダヤ教のように日本の大和民族のみを対象にする閉鎖的な宗教のように考えられる。神社神道（国家神道）は、実際にそのような印象が強かったため、特に植民地において拒否感を与え、植民地民を神社神道に誘

ほど世に有難きものはなく誠一つで四海兄弟」(海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、28.)

¹⁰⁸ 杉島威一郎「黒住宗忠の『道』と『黒住教』」『芦屋大学論叢』44、2006年11月、96. から再引用。

¹⁰⁹ 「天照大神と同魂同たいなり。天照太神と同こん同体なれば、かの天照皇太神は一切万物を生じ給ふ大御神ゆへ、天地のあいた一切生し、一切何事も成就せずといふことなし」(杉島威一郎「黒住宗忠の『道』と『黒住教』」95. から再引用。)

¹¹⁰ 「神國とは、元赤縣州より皇國を指て言へる稱なる事。……『御紀』に……「吾東に神國有りて、日本と言ふと聞り」……「我朝は神國なり」とて、朝夕に天神地祇を禮拜祭り賜ふ事を載し給へり。此等神國ちふ文字の出所なる云云。……元高天原に無始より御坐せる三柱の天皇祖神の造化出給へる物にて、……御國をのみ、神國ちふ道理は無きに似有れど、……此御國にて天照大御神、月夜見大神、及び止事なき御神等を生奉り給ひて、天地の造化の本基を建立給ひし御事、……又天照大御神は御父の大神の大命の隨に高天原を悠久に統御めして、所有る萬世界の大神に坐る事申すも更なる……『玉銚首首』に「日神の本つ御國と皇國はし百八十國の秀國祖國」また「天の下國は多けど神魯岐の生成し坐せる、大八洲國」また……『鈴屋集』に……「百八十の國の祖國本つ國、皇御國は尊きろ哉」とも詠れたり。」(田中義能『黒住教の研究』、48-49.)

¹¹¹ 杉島威一郎「黒住宗忠の『道』と『黒住教』」99.

¹¹² 海老名弾正『基督教本義』、106.

導する政策が円満に実施されなかった。しかし、黒住教は外国人も天照大神の恩恵を受けられるとみなす教理を説破した。この点はキリスト教における新約聖書的な新しい契約、イエスの福音のような性格を持つので、海老名は教祖宗忠を、旧約聖書のイザヤのような日本における預言者として考えた。

「教祖宗忠は外國人も天照太神の御徳を信仰し豊に御蔭を蒙むる時代の到来するを預言せりと云ふ」¹¹³

「心安く暮すも高天原なり其原にそ神は在します」という宗忠の話を用いた海老名は、天照大神が世界のすべての人々の「親神」となる瞬間こそが高天原(神の国)の実現であると次のように述べている。

「天照太神は萬人の親神なり高天原は現在此の所なり何人にて我を離れて誠に歸らば病氣を免かれ苦痛を忘れ」¹¹⁴

海老名は、儒教と仏教を経る中でも闇の時代が続いたが、「天照太神の大道の中興と識認せり世界開闢以來天照太神の御徳は天地に充満し居る」¹¹⁵とする。そして「天照太神の大袋に入らば釋迦も孔子も天地万物も同じ囊中の事物なり儒も佛も天照太神の配下に存在するものなれば人は皆誠を取りさへすれば儒もなく佛もなく只四海兄弟あるのみと教へたる」¹¹⁶と、人間世界に天照大神の普遍化と世界化によって「四海兄弟」のための博愛の感覚が実現されることを願っている。田中も「道は天照大神で、直に日月である。日月から出た道で、日月は自然に四海を照さるゝと同様に、吾人は自然に道を行って、何等の苦痛をも感じない」¹¹⁷とし、すべての世界を照らし、癒している天照大神の存在を強調した。

このように天照大神を世界に伝える時こそ「黒住教は則ち天啓教なり」¹¹⁸と海老名は考える。そのように博愛同情が具現化している所では決して「狹隘なる排外主義を取る」¹¹⁹余地がないと断言した。37年後、出版した著書『新日本精神』(1935)では、次のように世界同胞兄弟の人道主義が「新日本精神」の第3要素であると力説するが、この内容は「天照大神と

¹¹³ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、1-2.

¹¹⁴ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、14.

¹¹⁵ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、14-15.

¹¹⁶ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、15.

¹¹⁷ 田中義能『黒住教の研究』、23.

¹¹⁸ 「教祖宗忠は天地萬有を經典とし誠の話心を明鏡とす儒佛の如きは世界の一小教派と認めれば……善は之れを取り悪は之を捨て萬神萬人萬物の親神たる天照太神の黙示命令を傳ふる……宗忠の教は則ち天照太神の御教なり(海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、18.)

¹¹⁹ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、40.

神」、「八百萬神と民」を比較した黒住教の理想と類似している。

「第三は、新日本精神の奥底には世界同胞兄弟の人道主義が胚胎されて居る、神の子の意識は必然的に世界同胞の人道主義となるのであります。……八百萬神ならば、その子々孫々は八百萬の個々別々の氏神を有するが故に、たやすく神孫の同胞兄弟を聲明する譯には行かない。」¹²⁰

海老名死後、延原大川も「天照大神」を民族的な信仰の対象から解放した黒住教の教えは、民族神であったエホバを普遍的な神として世界化したキリスト教と類似していると、次のように述べている。

「宗忠の宗教の特色は、従来民族神皇祖神としての天照大御神の御神格を、元霊神として、又、各人の心の神としてとらえ、可視的には、天地日月と仰いだことである。これはキリストが、エホバの神に対する革新的な考えと共通的なものがある。キリストは嫉みの神エホバを、その民族的な信仰の対象から解放して、『天なる父』に昇華せしめた。」¹²¹

したがって延原は「宗忠は決して一宗一派の教祖として、神殿の奥にとじこめておくべき人ではなく、日本の代表的な宗教家として、また世界人類の真の指導者として、新しく、その価値を認識されなくてはならぬ人である」¹²²と強調している。

4. おわりに：海老名の「黒住教」評価とその意味

海老名は『基督教の観たる黒住教の真理』の冒頭において「黒住教は日本神道の一派にして最も強大なるものなり……貴顕有識の間に於ても傳播し近年に至りては軍人も多く之に帰依しつゝあるなり」¹²³とし、黒住教こそ教派神道13派の中でも代表性を持ちながら、知識人や社会指導者の間にも信頼を得ている宗教団体である点を強調している。

自給独立を強調する会衆主義的な黒住教の教会組織運営と、男女の差別を反対する教理などは、¹²⁴ 明治維新を日本におけるデモクラシーの原点として設定し、組合教会の指導者と

¹²⁰ 海老名弾正『新日本精神』滋賀、1935、17.

¹²¹ 延原大川『黒住宗忠とその宗教』、9.

¹²² 延原大川『黒住宗忠とその宗教』、26.

¹²³ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、1898、1.

¹²⁴ 「教会は個々別々にして自給独立す正教會は本廳の認可を受て設立するものなり假教會講義所は信徒等勝手に設立するものなり本廳は金銭を以て更に之を扶助せず信徒の自辨に一任して顧みざるなり……本廳は教祖宗忠の郷里……宗忠神社にあり……教師の位置は……婦人にして教師の列に加はる者亦少からず是れ

して活動した海老名にとっては自ら理想として考える神道とキリスト教の共通点であった可能性がある。

初期である1898年に執筆した『基督教の観たる黒住教の真理』に現れた海老名の黒住教への評価は下記のようにまとめることができる。

- (一) 非常に高尚な宗教として日本宗教の伝統を豊かにしたが、まだ布教の現場では、太陽崇拝の宗教（拜日教）としての古来性を抜け出すまでには至っていない。¹²⁵それにもかかわらず、教祖宗忠の旨に従う時に希望があると評価する。¹²⁶
- (二) 天照大神と常に同席することが重要である。¹²⁷
- (三) 迷信的な要素から脱却することを注文する。¹²⁸ 既存の儀式的な神道との区別、教祖の本旨から離れ遠くなった現在の形式的姿を脱却すべきである。¹²⁹
- (四) 肉体的治療より精神的治療が教祖の真意が重要である。¹³⁰
- (五) 天照大神と一心同体になり、倫理性の回復による癒しを強調する。¹³¹
- (六) 欧米の基督教のように大日本帝国の国教になる資格ある黒住教である。帝国膨張に貢献できる教派神道として高く評価する。

「是我帝國人口十分一を占むる信徒を有しながら未だ國家の風教を左右する力なきによりて明に知るべきなり……天に任せ一大活物を捉らずんばあるべからず……活教は神恩豊にして世界に雄飛せんとする大日本帝國の國教たる資格を有すべし欧米の基督教といへども優劣を争ふこと能はざるに至るべし」¹³²

この2年後（1900年）、雑誌『新人』に掲載された「化石思想」においては、次のように黒住宗忠を、神道における「化石思想」（神代への回帰）に留まっている神道家や国学者と比較しながら「新生命を発生したる」「大日本帝國の預言者」であると次のように称賛している。

蓋し天照太神の聖徳は一視同仁にして男女の差別を付せざるに由るならん」（海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、2。）

¹²⁵ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、55.

¹²⁶ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、56.

¹²⁷ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、57.

¹²⁸ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、57.

¹²⁹ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、57.

¹³⁰ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、57.

¹³¹ 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、58.

¹³² 海老名弾正『基督教の観たる黒住教の真理』、58.

「神道家も亦多くは化石思想の人なり。神代巻を掲げ古事記を暗誦するも益あらん。…
 …過彼等も亦過去を尊崇するの徒輩なり。……神社は神々の化石の納まる所、……吾人
 は神道家も蘇生して、活思想を發せんことを熱望す。……黒住、井上の如きは新生命を
 發生したる人々なりと。黒住が千早振神代も今も同じこと唯末の代と思ふ憐さと詠ぜし
 は何等の卓見ぞ、……『（前略）我れは八百万神を集めて一體となすことを得る（後
 略）』驚くべきは四海兄弟の大元理をも感發せり。彼れは現代の御代は神代に優りて。
 ……彼れは神代を以て花の芳芽にして、今や其花の綻び始めたる春の御代と詠したる所
 もあり。……實に大日本帝國の預言者といふべし。賀茂本居の二先生は古學の斧鉞^{みえつ}を提
 げて、神代を穿ち、平田産靈神を以て世界萬國の造物者と論斷せしが、黒住に至りては
 高天原をも産靈神をも日輪と偕に一口に呑み込みて、自から神明と化身せり。神明の在
 す所は神代なり高天原なり。……神明の存在を神社に限りて多くは其社司となる。……
 （神道家たちは、筆者註）万民各個の神たる本能を發揮するの道を講ぜず。彼等の思想
 は明治の初年に於て既に化石したるなり。吾人は其復活するの時あるを預言すること能
 はざるなり。」¹³³

海老名は、神官神職はもちろん、天御中主神と神武天皇を中心に「敬神精神」と「明治時
 代」を開いた国学者までも、結局、現代と未来を見逃す、過去回帰的な「化石思想」に陥っ
 てしまったと批判する。「新日本の精神的国是」（1903）においても「神儒佛の三道は依然と
 して舊態を民衆の中に保てり」¹³⁴とし、宗教的な生命力を欠けている神社神道の限界を述べ
 ている。しかし神道にも、天照大神の現存性を強調した黒住の場合、自ら神明の化身になっ
 て、八百万神のような各個人の潜在力と可能性を明らかにした点において、「活思想」と
 「新生命」を発生する大日本帝國の預言者であると高く評価している。同文書で海老名は、
 「日本に渡來した外國人宣教師は歐米の化石せる舊思想を代表す。彼れ固より基督教の大眞
 理を有すと誰も、其説明法は皆盡く舊式なり。基督教を彼等が化石思想の中に埋没せられた」
¹³⁵と批判している。このように海老名は、歐米から伝えられたキリスト教には生命力がない
 し、それを乗り越え、新生命を与える日本の黒住の宗教思想に注目し、実際にそれを日本の
 キリスト教に受け入れ調和と結合を模索したと考えられる。

晩年に『新日本精神』（1935）を提唱する時も、黒住宗忠の歌を紹介しながら「幕末に當っ
 て宗教神道の勃興は新日本精神の曙光を歌うて居る」¹³⁶とし、日本人に欠けている宗教心と
 信仰心の部分を黒住教などの教派神道が充たして、「新しい人生觀と世界觀」を与えたと評
 価する。翌年（1936）に行なった最後の朝鮮訪問の時も「新日本精神」という講演で次のよう

¹³³ 海老名弾正「化石思想」『新人』1900年9月、13.

¹³⁴ 海老名弾正「新日本の精神的国是」『新人』第4巻第1号、1936年1月、2.

¹³⁵ 海老名弾正「化石思想」『新人』1900年9月、15.

¹³⁶ 海老名弾正『新日本精神』滋賀、1935、18-19.

に黒住から深く共鳴して、天照大神を宇宙の神として考えることになったと力説している。

「その教祖黒住宗忠は洵に偉い人で私から見ると本當の宗教家である。私などは肚のドン低から共鳴する所の人であります、黒住宗忠は天照大御神を高調してをります。…天照大御神は世界、宇宙を照らし給ふお方である。」¹³⁷

海老名は「天照大神」の眞の価値を明らかにした黒住教の教えと倫理的な可能性、そして宗教的な豊かさに注目して自らの「新日本精神」達成のためのキリスト教との理想的なパートナーとして考えている。しかしより完全な結合の対象になるためには黒住教に残存している迷信的要素から脱却すべきであると主張する。それが可能になるならば、日本の国教になる資格もあると考えた。これは「倫理・道徳」に傾倒し、「宗教・信仰」の要素が与える「靈能」を失ってしまうならば、単なる過去回帰に留まり完全な「新日本精神」の実現、すなわち「神の国」建設の動力を確保できないと考えたためだ。「道徳」と「宗教」の間にはっきり線引きをしたいいわゆる「消極的な神社非宗教論」の閉鎖性を克服するため、「天照大神」を中心に据えた宗教神道(教派神道)である黒住教がより明確な倫理性、世界性、普遍性を持つと、その中心には神が人になったキリスト教の「ロゴス」概念のように、日本における天照大神も「敬神」という日本のロゴスによってキリストと結合し、欧米から自主・独立した「日本的キリスト教」になりうるということであった。このような海老名のキリスト教は結局「神道的キリスト教」の進路に沿っていることを否定できない。すべての議論を「天照大神」に「帰一」させようとした海老名の考えは、結局1930年代、現人神として登場した「天皇帰一論」と繋がって行く。これは帝国膨張とともに内地日本の「国家神道」とは異なる植民地という背景において形成された「帝国神道」の神道論から海老名の神道理解を究明すべき理由でもある。

(ホン・イピョ 明治学院大学キリスト教研究所協力研究員)

¹³⁷ 海老名弾正「新日本精神」『朝鮮講演』、1936、10.